

近藤克則 著

研究の育て方—ゴールとプロセスの「見える化」

麻原きよみ（聖路加国際大学看護学研究科）

「初心者が最初に読んで研究全体の流れやめざすべきもの、各段階で必要となる考え方や進め方など研究（テーマ/プロジェクト/論文/者）の育て方が1冊でわかる本」（序）である。研究方法や論文の書き方だけでは研究を実施できない。試行錯誤や途方に暮れた日々があり、また論文がアクセプトされたときの喜びがある。このような経験や感情を含めて研究のプロセスであり、よりよい研究のために手間をかけ力を尽くして育む、まさに「研究の育て方」である。

本書は、学生目線で学生に語り掛けるように書かれている。学生がつまずいたり陥りやすい落とし穴について取りあげ、具体的な対処法を提示する。知りたいことについてすぐ答えを求めたい今どきの学生のために、研究プロセスにおける進め方や考え方について、あの手この手で理解できるように工夫されている。文章の表現の仕方を例示したり、コラム、図表を多用したり、研究の各段階でやることの落ちがないようにチェックリストで確認できるようにしている。分析の視点について理解を促すために、「串だんご」（p162）、「駅のプラットフォームの写真」（p174）などを例示し、「なるほど」と納得させる。本の表の見返しには、「目的」「対象と方法」など各研究段階が書かれているページが、また裏の見返しには各チェックリストの書かれているページが示されており、すぐに目的のページにたどり着くことができる。なかでも、「優れた文献だけを20～50本選んで引用する」（p74）、「目的が3つあれば結論も3

つ」（p74）、「考察分量の目安は、1：3～4：1～2程度」（p177）、「5～7回は推敲する」（p190）と数字で目安を断定した記載は小気味よいほどであり、学生の心強い目安となり安心感を与えてくれることだろう。これは卓越した研究実績と豊富な学生指導の経験をもつ著者ならではのエビデンスに基づくものであり、どれも納得のいく数字である。これらはまさに「見える化」である。

本書は、「研究の育て方」だけでなく「研究者の育て（ち）方」、すなわち研究者としての態度も教示している。「よい研究デザインの3条件」、「意義・新規性・実現可能性」を文中で何度でも繰り返す。「研究とは、質の高い臨床や健康長寿社会の実現のために必要で普遍的な価値があるもの」（p231）と研究者としての姿勢を説く。しかし一方で、研究の意義や価値はどこにあるのか、「それを追求すること自体が楽しいとか、面白いとか意義が大きいと思える研究テーマや指導者と出会えることが重要」（p55）と、現実的で肩の力を抜くような語りかけをし、その中に著者自身の研究者としての経験を惜しみなく織り込んでいる。

本書は、学生や研究初心者に最適である。私は研究指導している学生に、本書を一度読んでから来てほしいと思う。しかし本書は、学生だけでなく、研究者にも研究指導者にも新たな気づきを与えてくれるそんな1冊である。

（A5判 頁272 2018年 定価2500円＋税[ISBN978-4-260-03674-0] 医学書院刊）